

インジェクション・イノベーター 技術革新で 世界市場を切り開く

ソディックプラステックの次世代戦略



鈴木 正昭 会長



藤川 操 社長

井水 座談会に先立ち本年3月に発生した東日本大震災に見舞われた方々にお見舞いを申し上げたいと思います。大震災では多くの企業が被災しました。そうした中で、ソディックグループは各グループ会社が手がける工作機械、射出成形機などの顧客企業に対して復旧支援に尽力しています。その姿に日本のモブクリを支える企業集団としての真価を見ることが出来ます。

さて、その中核企業の一つであるソディックプラステックは、薄肉大型導光板射出成形機を開発し、本年の当社主催の「2010年十大新製品賞/日本力(にっぽんりき)」賞を受賞しました。優れた技術力、内外の注目を集めています。設立の経緯や背景などについて、ソディックとともに、ソディックプラステックの創業者でもある古川利彦相談役(ソディック会長)にお伺いしたいと思います。

古川 ソディックプラステックは1989年にソディックの射出成形機の開発部門である

ソディックプラステックは先進的な技術開発力を源泉として新事業・新領域を開いている。1992年の設立以来、高精度の射出成形を実現する「Vライン方式」を開発するなど、相次ぐ技術革新によって精密成形分野で独自の地位を確立した。そして、このほど世界に先駆けて発光ダイオード(LED)テレビ向けの薄肉大型導光板射出成形機を開発。また同社の技術革新は食品機械やリニアモーター事業にも拡大し、経営基盤を一層強固なものにしている。そこでソディックプラステックの古川利彦相談役、鈴木正昭会長、藤川操社長の3氏と日刊工業新聞社の井水治博社長がソディックプラステックの成長戦略について会談した。



古川 利彦 相談役

高精度の成形機開発 食品機械もシェア拡大

鈴木会長

古川相談役

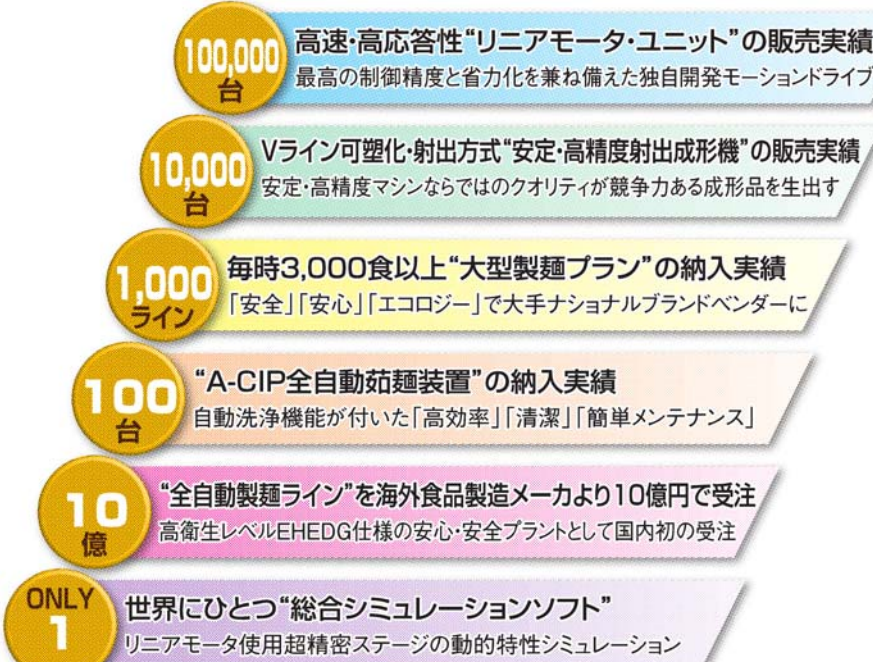
TR事業部が独立したもので、今年で23年になります。Vライン方式射出成形機の販売台数も今年で延べ1万台を突破しました。

射出成形機開発の動機は事業多角化の一環です。当時、放電加工機の顧客である金型の製造会社から、良い金型を作っても、良い成形品ができないという声を聞いていました。今とコンセプトがあまり変わらない製品が載っていました。これは当時の技術へのこだわりが、今も変わらずに引き継いでいることを意味します。販売台数1万台には時間がかかりましたが、一生懸命に事業を展開した結果、一部からスタートした会社が株式上場までにこぎ着けました。今でも技術にこだわりを持ち、射出成形機の古川相談役にグループ戦略について伺います。

井水 ところでソディックグループでは放電加工機をはじめ、各事業において、グループ各社が連携して大きな力を生み出しています。ソディック創業で、ソディック会長の古川相談役にグループ戦略について伺います。

古川 ソディックグループでは他社がまねできない最高水準の技術を確立しています。技術は世界一と自負しています。一般的に業況が良いときには良い事業に特化しがちですが、当社はそうではなく、業況が良い

ソディックプラステック20年の技術革新実績



井水 御社の先見性が、Vライン方式射出成形機を生み出し、精密成形分野に独自の地位を築いているわけですね。藤川社長、改めて強みや技術力についてをお話ください。

藤川 ソディックの部門としてスタートした当初は射出成形機についてのノウハウが不足していました。だがこのことは裏を返せば当社は、しつらみ、射出成形機の精度を上げるには一定温度での可塑性、一定量

の射出にあるという仮説をもとに、一般的な射出成形機であるインライン方式にとらわれず、可塑性、射出分離による独自の「Vライン方式」を生み出しました。当初はインライン方式も開発しましたが、他社の後追いで意味がないので、他社との差別化を明確にするうえで「Vライン方式」で製品を開発してきました。同方式は他社にはなく、当社が他社に性能を疑問視する時期がありましたが、これに対し同方式はあら

ゆる樹脂および金型の成形テストで優位性を発揮しました。樹脂温度の安定性が高く、射出量も安定します。その特徴は精密成形で発揮されました。当初は販売台数が伸びませんでした。薄肉・超精密成形という特微により、次第にファンが増え、98年には油圧と電気という電動ハイブリッド成形機を開発しました。駆動部に合った動力源を適用することで、金型の長寿命化や成形精度の向上に威力を発揮しました。堅型成形機でも電動ハイブリッドの特徴が強みとなり、堅型成形機部門では国内シェアの2割以上を占めています。

井水 精密成形技術は特に電子部品などに特徴がでているようにですね。

藤川 その通りです。コネクタをはじめとする精密成形部品が得意です。今年の十大新製品賞/日本力賞を受賞した薄肉大型導光板の安定成形も、射出機構や型締めの実直動作、コンプレッション制御などの複合技術が可能になりました。今後の導光板需要はテレビだけでなく、照明関係にも採用が加速しそうです。高価であっても、付加価値が高いので顧客に選択してもらっています。また熱可塑性樹脂だけでなく、熱硬化シリコン成形でも安定精密成形が可能です。例えば米国では、シ



リコンプロフェッショナルのブランド名で市場に供給し、シリコン加工のソディックとして名を立っています。そのほか、プラスチックの原料として、軽金属成形機の一環として、軽金属成形機の開発も手がけています。すでにマグネシウム成形では実績があり、スマートフォンやタブレット端末の枠などにも採用されています。今後はマグネシウム以外の軽金属について、も研究開発していく方針です。

井水 射出成形機は数々の革新的な技術を生み出してきてきた。食品機械についてはどうですか。

鈴木 ソディックプラステックでは射出成形機にとどまらず、ほかの事業にも食欲(どん)よく、に取組んでいます。食品機械はTOM事業部で手がけています。もともとは95年の阪神大震災の時に、当時食品機械を手がけていた企業に当社の工場を提供したのがきっかけでした。資材提供など協力をしているうちに、一緒に事業をやろうというところになったのです。主

力には製めん機で、25年以上の歴史があります。製めん機の国内シェアは30%を占めます。また、製めん機単体だけでなく、生産システム全体を手がけているのも強みです。導入実績は1,000ラインにのぼります。例えば、自動洗浄機能が付いた、高効率で清潔、しかもメンテナンスが簡単なゆでめん装置の「A-CIP全自動」が、食品機械の納入実績を通じて、環境改善分野に提言できるような環境機器にも力を入れています。

藤川 当社はリニアモーターや環境機器なども手がけています。食品機械の納入実績を通じて、環境改善分野に提言できるような環境機器にも力を入れています。

市場はアジア圏へ移行 藤川社長

多様な事業 さらに進化

井水

井水 ところでソディックグループでは放電加工機をはじめ、各事業において、グループ各社が連携して大きな力を生み出しています。ソディック創業で、ソディック会長の古川相談役にグループ戦略について伺います。

古川 ソディックグループでは他社がまねできない最高水準の技術を確立しています。技術は世界一と自負しています。一般的に業況が良いときには良い事業に特化しがちですが、当社はそうではなく、業況が良い



日刊工業新聞社社長 井水 治博

井水 ソディックグループでは海外のウエートが高くなり、市場ニーズは中国を中心とするアジア圏に移るでしょう。国内だけでモノづくりを追求しても限界があります。ソディックグループはタイ、中国に製造拠点を有します。グループの製造拠点を有効活用し、タイで射出成形機の生産を年内に始めます。海外生産で価格競争力を上げて振返る方針です。汎用品は製造原価が安価なところで製造し、日本では加賀工場

は一段と強固になっていくでしょう。LEDやリサイクルワイヤなどもその一環であり、一つの事業を確実に成長させていきます。

鈴木 我々の多様な技術を生かして採用してもらいたいですね。例えばモーターでは高速・高応答性のリニアモーターユニットの販売実績が10万台になりました。最高の制御精度と省力化を兼ねた独自の開発モーションドライブが強みです。モーターについてはコンローラの技術もあり、そのほか、事業化に向けていろいろ仕掛けをしています。そのほか、LEDの商品化で放電加工機の技術が生きたように、モーターの省エネ制御技術などもほかで生かしていくでしょう。技術的に魅力のある分野はたくさんあるの

井水 ソディックグループは多様な事業領域を持ち、さらに進化を遂げようとしています。各事業が自律的な成長を遂げ、拡大すればいずれ大樹になります。特徴を持った各事業の複合体としてソディックグループが、今後も成長を続けていくことを確信した気持ちです。本日はありがとうございました。